
雨の記憶

志内炎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

雨の記憶

【Nコード】

N8874B

【作者名】

志内炎

【あらすじ】

十八歳の雨の日。「私」は人を轢いた車の助手席にいた。十八年後、罪はどこへいったのか。あの日の選択に間違いだと気付いた「私」が、選んだ道は……三部作の一部。作者処女作。

(前書き)

この小説は完全なフィクションです。

ブレーキの音……ワイパーが左右に規則正しく動く……彼の言葉……最後のキスは今ではもう甘くない。

目が回って、墜ちていくような感覚で目覚める。五歳と三歳の娘が仲良く眠っている。秒針の音と雨の音がする。

そつと子供部屋をでる。まだ十時半。夫の帰宅には少し時間がある。

「傘、持っていたかしら」

カーテンを開けて、外を確かめようとする手が止まる。

（雨は……）

頭痛がする。薬を飲み、ヘッドフォンをかけて、雨の音をかき消す。迎えに来てとは、夫は言わないだろう。私が雨の日の運転を極度に嫌がっていることを知っている。理由は聞かない。

（優しい人だわ……）

ぎゅっと目をつむり、耳に流れる音楽に集中する。これも、優しい夫が、最近の曲を録音してくれたものだ。

彼も優しくかった。いつも自慢の車で送り迎えをしてくれた。二つ年上。もうすぐ二十歳。目鼻立ちのはっきりしたハンサムで、特に睫毛は、羨ましくらい長く濃かった。

地元では有名人。特に車が有名だった。彼がいるロータリーへ足を運び、仲良くなっていった。

高校生だった私を家まで送ってくれて、初めてキスをした。それから初めての夜。

初めての男、ステータス。嫉妬と羨望の視線。彼に奥さんがいる事なんて、どうでもよかった。

卒業後の進路は地元の銀行に決まっていた。彼は門限を守って、

それでもいろんなところへドライブに行った。行く先々で声をかけられる。それくらい有名だった。

その雨の日。

何度も抱き合って、門限ぎりぎりになった。家までの道を走っていた。住宅街を抜け、田舎道を通る、近道。よく使う道。

田舎道に入ってすぐだった。

車はかなりのスピードを出していたはずなのに、全てがスローモーションに見えた。

右手から出て来たおばあさん。レインコートを着て、自転車を引いていた。鈍い音……空中で雨粒を蹴るおばあさんの足……ブレーキ……

彼は外を見て、黙って走り出した。私も黙っていた。鼓動の音で鼓膜が破れるのではないかと思った。

家から少し離れたところで、車は停まった。彼は私に傘を渡し、キスをした。長いキス。

「おまえは今日、俺と会ってない」

「……」

「いいな」

「うん」

「さ、行け」

押し出されるように車を降りた。彼は最後に

「仕事、がんばれよ」

と言った。

彼に会ったのは、結局それが最後だ。彼の顔はもうなんとなく思い出せない。何枚かあった写真も捨ててしまったし、もう二十年近く時間が経っている。

（お互いわからないだろうな）

その言葉に、わからないでいて欲しいとの願望が含まれている事を

知っている。胸が痛む。

事故の事は、またたく間に広まった。新聞にも載った。

『少年A、無免許で轢き逃げ。被害者は病院に搬送されるも、死亡』
ロータリーから彼の車は消え、しばらくは噂も消えた。いや私の耳には入らなかった。

私はいつもビクビクしていた。警察が家に来るのではないかとどこかで目撃されているのではないかと。もし、一緒にいたのがばれたら、罪に問われるのではないかと。

卒業式の三日前、彼の事を知っている友達が言った。

「裁判終わったよ。少年院だって……相手は奥さんもいるんだし、もう会いに行くとか、考えちゃだめだよ。辛いだろうけど、もう忘れなよ」

一瞬何を言われているか、わからなかった。そして、泣いた。噂が耳に入らなかったのは、疑われているからではなかった。不倫の彼が事件を起こした、気の毒な女の子……そう思われていたからだ。黙って肩を抱いてくれた友達にも、真実を話さず、悲劇の被害者を装った。

「彼に会いたい……」

ようやくそう思ったのは、最後の春休みだった。もう罪に問われる事はないだろう、その安心感で、やっと、彼の事を考えられるようになった。

私をいかなかった事にくれた。警察でも言わなかった。私はそれだけ愛されていた。入社式では心の底から感謝した。こうして普通に就職していただけるのも、彼のおかげ。

だが私は会いに行かなかった。手紙を書く事もしなかった。仕事が大変だった。バブルがはじけたところだった。

正直、一番下っ端の私にはあまり関係なかった。仕事は大変だったが、楽しかったし、OL生活を満喫していた。

合コンにも行った。ただし、地方出身者の集まりにだけ。彼に感謝しながらも、彼との繋がりを一切否定していた。

二年後、銀行の解散に伴い、私は縁故で再就職した。彼がいた少年院のある隣の金融会社。彼が退院したと噂で聞いた直後だった。

何度か男とも付き合った。二十七くらいまでは、未婚既婚問わず付き合っていた。

そろそろ将来を考えると、付き合い始めたのは、会社の地元のコンピュータ関係のエンジニアだった。一つ年下で、優しい顔をしていた。

付き合いにはなんの問題もなかった。とても優しくしてくれたし、私も精一杯尽くした。ただ、十分な収入もあるのに車に乗っていないこと、野球中継をみないことを不思議に思っていた。

二年近く経ち、無事に結婚した。今の夫だ。
ハネムーンの夜、夫はこんな告白をした。

母が病気で亡くなったのは、話したよね？そう、心臓が悪くて。実はその日、最後に一緒にいたのは僕なんだ。

小学校三年だった。学校から帰ってすぐ、近所に遊びに行つて。帰ってきたら、母が苦しそうにしていた。僕はすぐ救急車を呼んだ。父にも連絡したよ。でも僕がしたことはそれだけ。後は祈っていた。早く救急車が来ますようにって。

近所の大人を呼びに行きもしなかった。祈っても、なんにもならないのね。……怖かったんだ。

父は今でも、あの日、あの通りに違法駐車していた人間を恨んでいる。母を殺したのは奴らだって思ってる。救急車の到着が遅れたのは確かだからね。でも本当は僕のせいなんだ。

何も出来なかった。それに、よく思い出して見ると、学校から僕が帰って来た時には、母の顔色はよくなかった。僕はそれに気付かないふりして遊びに出かけた。野球、やりたかったんだ。

今でも父には、その事は言えない。でも、気付いているかも知れない。あれから、一度も野球はやってないから……
僕は母親を見殺しにしてしまった。その罪は消えないけれど、そのぶんも、あなたを大切にします。

衝撃的な告白だった。ハネムーンから帰ってからも、私の体調は回復しなかった。

私も告白するべきか？でもなんと？

轢き逃げした車に乗っていました。いい歳をしていた彼も私も、車から降りて被害者の様子を見る事もせず、その場を去りました。そして彼は私をその場にいなかった事にして、私の将来を守ってくれました。

私はビクビクして過ごした。雨が降る度頭痛を起こし、怖い夢を見た。

彼に感謝しているなんて思いながら、彼との関わりを否定して生きて来た。そして懲りもせず、節操のない恋愛を繰り返し、あなたにたどり着きました。

もしあの時、すぐに通報すれば、おばあさんの命は？彼の罪は？ご遺族はどうしているんだろう？彼や彼の家族は？

その事すら、たった今まで考えたことすらなかった。

そして私はハネムーンベイビーを授かった。

突然、ヘッドフォンから流れて来た曲に息が止まる思いがした。

あの日、車の中で流れていた曲の力バー。

「ただいま」

いつのまにか帰宅して部屋のなかにはいた夫に驚き、ヘッドフォンのプラグを引っ抜いてしまった。大音量で曲が流れる。

慌てて止めたものの、時既に遅く、子供部屋から娘達が現れる。あんまり会えないパパを見つけて纏わり付く。

「寝ないとだめよ」

「いいじゃない。明日は幼稚園ないだろ」
「でも……」

「パパ、雨が降っているとママは怒りんぼママだから、気をつけて」
娘の言葉にドキリとする。三人は顔をくっつけて、楽しそうにしている。

あの日、既に選択を誤っていた。そうして月日が流れ、間違った道の上に私の人生は構築されて来た。夫との出会いも、娘の誕生も。もしも、あの日に戻れるなら、正しい選択をする。でも、もう戻れない。

おばあさんを生き返らせる事も、彼の罪を軽くする事も、出来ない。ご遺族や彼の家族にも同じ時間が流れた。謝罪しに行く事は、誰の、何を助けるのか。

私は黙って生きて行く。

小学校三年の自分を悔やむ夫のそばで。間違った選択をしない事を教えるのを一番の子育ての条件にして。雨の度に思い出し、心の底から懺悔して。

雨があがれば、まるで何事もなかったように装って。

一番大切な人たちに、何も気付かれないように。一生しまい込んで。

そして、せめて彼が現在幸せであることを祈って。

ブレーキの音……ワイパーが左右に規則正しく動く……彼の言葉……最後のキスは今ではもう甘くない。

(後書き)

「私」の選択が正しいのかは、作者自身も悩むところです。
編として「彼」の現在も執筆予定です。 続

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8874b/>

雨の記憶

2009年5月29日04時32分発行